

私の目指す社会

青垣中学校 三年 塩田 希実

私はある日、テレビでパラリンピックの映像を見ていました。選手たちは車椅子や義足を使いながらも、全力で競技に挑んでいました。ある選手が競技をやり遂げた瞬間、笑顔でガッツポーズをした姿がとても印象的でした。「障害があっても、こんなに輝けるんだ」と胸が熱くなりました。でも、その時の私は、まだ障害者は私たち健常者とは違う特別な人だと思っていました。そして、障害のある人が社会のさまざまな場面で不便を強いられ、差別を受けていることを、あまり知りませんでした。私の学校にも特別支援学級に在籍する友達があります。同じ学年にいても、一緒に授業を受けることが少なく、みんなと同じことをするのが難しいので、自分たちと違うように感じていました。駄目だとわかっていてもどう接していいかわからず、できるだけ関わらないように距離を置いていました。パラリンピックを見て、こうした身近なところで自分自身も差別的な態度をとってしまっていることに気づきました。そして、社会では障害者がどんな状況に置かれているのかが気になりました。

私の弟には、チック症という障害があります。チック症とは、自分の意思とは関係なく体の一部が早く動いたり、突然発声したりする脳と神経の機能障害です。私の弟は外見を見ただけでは障害があるのかわかりません。だから私は弟に障害があると知った時、正直とても驚きました。一緒に過ごしている中で、確かにたまに変だなと思うこともあったけれど、障害があるように見えなかったからです。このことについて「本人が傷つくようなことを言われてしまったらどうしよう」と少し不安に思うこともありました。けれど、障害があるからと言って、障害のない人たちと同じ生活ができないわけではないし、その人の気持ちや優しさなど、性格や人格そのものが変わるわけでもなく、何にも変わらないのだと弟から教わった気がしました。

障害には、身体障害、知的障害、精神障害など、さまざまな種類があります。目に見える障害もあれば、私の弟のように、外見からはわかりにくい障害もあります。だからこそ、私たちは人を「障害の有無だけで判断をしない」「その人自身を見る」ということを大切にしなければいけないと思います。

例えば、駅で白杖を持っている人を見たら、必要であれば声をかけて案内をする、車椅子の人が段差で困っていたら手伝うなど、見える障害に対して少しの勇気でできる支援があります。でも、障害の有無に関わらず、誰に対しても隔てなく助ける、こうした小さな行動が、障害のある人にとっても大きな安心につながるのだと思います。

しかし、支援することだけが大切なわけではありません。障害のある人も、自分の考えや夢を持ち、自立して生活したいと思う人は多いと思います。だから、私たちは「助ける対象」としてではなく、「同じ社会の一員」として接することが必要です。そのために、障害があるからと言って何でもすぐに助けるのではなく、困っている様子を見かけたら声をかけて手を差し伸べるなど、場面を考えて行動することも大切だと思います。そのためには、その人たちを見て見ぬふりをするのではなく、その存在に気づき、意識することが大切です。これは学校でも同じで、特別支援学級の友達と生活することは、互いに理解を深める大きな機会だと思います。

日本には「障害者差別解消法」という法律があります。この法律は、障害のある人が不当な差別を受けないようにするためのものです。また、「合理的配慮」という考え方もあります。これは、障害のある人が他の人と同じように活動できるよう、状況に応じて工夫や調整を行うことです。例えば、聴覚障害のある人に手話通訳や字幕をつける、車椅子の人が通れるようにスロープを設置するなどです。こうした取り組みが進めば、障害のある人も安心して暮らせる社会に近づけると思います。

でも、一番大切なのは、相手の立場に立って考えること、そしてお互いを尊重する心だと私は思います。私たち一人ひとりの行動は小さいかもしれませんが、その積み重ねが「誰もが暮らしやすい社会」を形づくると 생각합니다。障害がある人も、ない人も、同じ社会で共に生きていく、そのためには、「理解しようとする姿勢」と「思いやり」が必要です。私は、誰もが平等で、不便さを感じない、みんなが笑顔で過ごせるような社会を作っていきたいと思います。私は、これからも出会った人を見た目や先入観で判断せず、その人自信を見て関わっていきたいです。それが、私たちの社会をもっと優しく強くする力になると信じています。